

(はじめてのキリスト教)

偏愛？それとも博愛？

(ルカ一五・一一～三二)

日曜学校校長をしている同労者。その奉仕の姿勢に頭が下がる。特に素晴らしいなと思うのは「公平」を保とうとする姿勢。子どもはある意味素直であり何より「公平さ」を求めるもの。気を付けないとすぐ「○○ちゃんばかりズルい！」となる。もちろん「ズルい」という言葉が発せられる際には「嫉妬心」とない交ぜになつて用いられている場合もあるから、そこを見極めるのも大切ではあるのだが、同時にこちらの側では公平性が担保されているかについて吟味をすることを忘れてはならない。「森友」や「加計」の裏側になんとなく「ズルい」ものを感じる。それを放置してはいけない。

閑話休題。放蕩息子の話に腑に落ちない思いを持つ人が一定数いるようである。「この父は偏愛ではないか」俗にいえば「弟ばかりズルい」というわけである。しかしよく読んでいくとそれは大きな誤解である。このたとえの本来の主役である父は偏愛ではない。博愛のお方である。以下それを見

一、弟に対する父の愛

父の弟に対する愛はその忍耐深さによつて表現される。まだ生きていた父に向いざつくり言えば「遺産をよこせ」と言った弟は失礼な人間であった。「愛は非礼を行わず(一コリント一三・五)」という言葉から考えれば弟は父を愛してはいなかったと考えてよい。しかし父はそれでも弟の要求に応えたのだ。おそらく父はそうすればこの息子がどうするかは予想出来ていただろう。しかしそれでも彼は非礼に非礼を返すことなく、耐え忍んだのである。次に父の愛は「待つ」愛であった。弟息子がぼろを引きずり父の家に帰ろうとしたとき、父は「まだ家までは遠かったのに(二〇節)」父は弟を見つけて出した。これは偶然ではない。父は待つて、いや待ち続けていたのだ。だからこそ弟息子を見つけないで駆け出すことが出来たのである。ここに父の愛の継続性を見ることが出来る。第三に父の愛は抱擁する愛でもあった。そして愛の抱擁は弟が父に仕掛けたある種の取引、即ち「雇用してください」を言わせない力に満ちている。それどころかしもべたちに命じて子であることを示す晴れ着と指輪と靴を履かせ、祝宴を開いたのである。父にとつては彼はどこまでも「子」以外の関係はなかったのだ。

二、兄に対する父の愛

では兄に対してはどうだろう。父は兄に対しても実に忍耐深く接している。財産を半ば持ち逃げして放蕩の挙句戻ってきた弟。しかも宴席で喜んでいようであろう弟の姿を思い浮かべ、兄は思った。「ズルい！」と。そうして彼は扉の外でひねくれていたのだが、そこに父がやってきて「いろいろなだめだめ(二八節)」ひねくれて、意固地になつていよう人に関わるのは実にシンドイ。忍耐が要る。しかも父親はパーティーの主催者だ。中座を続けるにも限度がある。だが父は兄の怨嗟の声に耳を傾けるのを止めない。忍耐深いのだ。父の兄に対する愛はまた待ち続けるものでもあった。この物語の再終幕はおそらく祝宴の扉の外の暗がりであろう。つまり父親は待ち続けていたということだ。「取りつく島もない」と言つて退散したり、「そこで頭を冷やしておけ」と怒鳴つて扉を閉めることはなかったのだ。父は兄の回心を待っていたのだ。父の兄に対する愛は包む愛でもあった。確かに父は兄を抱擁したとは書いてはいない。しかし自らを奴隷だとして、父を「あなた」、弟を「あなたのあの息子」と突き放す兄に父は「子よ、おまえはいつも私といつしよにいる。(三一節・新改訳第三版)」と言つて、彼を家族の関係の中に包み込もうとしているのだ。

* * *

世にいう放蕩息子、最近では失われた息子たちのたとえはそれが語られた「状況」と一緒に記録されている。つまりその状況に着目すればこのたとえ話の真意に迫る手がかりが得られるということになると考えてよい。そこで一五・一を読むと、このたとえを聞いたのは①イエスのもとに集まつてきた取税人や罪びととそれを快く思わずに陰口をたたいていた②パリサイ人や律法学者たちであることが分かる。そうであればイエスの意図は弟息子を①に、兄息子を②になぞらえていると考え、問題は①。川口に「罪人の友主イエス・キリスト教会」という元やくざの牧師先生が牧会されている教会があるが、そこには多くの罪や問題を抱えた方が集まっていると聞く。しかしよく考えると聖書は「義人はいない、一人もない」と断言しているのだから、本来世の教会は皆「罪友」教会でなければいけないはずだ。神の目で見れば人はみな罪を持ち、失われ、救われるべき存在だ。イエスはそのために来られた。対象はすべての人だ。神の愛は偏愛ではない。兄も弟も、君も僕も、あなたも私も、日本人も中国人も皆等しく愛されている。さあこの素晴らしい愛と祝福を受け取り、神の家族の祝宴に加わろう。扉を開けるのはあなた自身である。